

新型コロナウイルスの流行に備えて

—流行状況と予防法について—

元国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センター長
元世界保健機関(WHO)インフルエンザ協力センター長

小田切 孝人 (高校 24 期)

このところ連日連夜、常にトッ
プニュースで報じられている新型コ
ロナウイルスの流行が日本でも深刻
な局面を迎えつつあります。感染経
路が辿れないどこで感染したか分か
らない市中感染が始まっています。
もはやどの県、市町村で感染者が
出ても不思議ではない状況です。感
染者の発生はいきなり身近にやっ
てきます。疫学の常識では、そのよ
うな状態になると周りには既に二〇〇
人以上の感染者いると思っただけが
いいのです。

私はインフルエンザの専門家です
が、コロナウイルスによる肺炎には
因縁があり、二〇〇三年の重症急性
呼吸器症候群・SARS コロナウイル
スによる重症肺炎の流行の時の日本
国内の検査診断の対応者でした。全
国から押し寄せる検査のための検体
と戦いつつ、我々の一挙手一動にマス

コミが敏感に反応するというプレッ
シャーに耐えつつ、日本国民を守る
ため自分の命を懸けるとの使命感で
研究所に泊まり込みでやっていたこ
とを思い出します。今まさに国立感
染症研究所の後輩たちは、チャー
ター便で中国から次々に緊急帰国し
た人たちの検査や横浜のクルーズ船
の検査のために二十四時間体制で過
労死の淵を歩きながらも奮闘してい
ることでしよう。今でも研究所には、
『元センター長の寝袋』が残っている
ので、有効活用されているかもしれ
ません。

1 国内での流行状況と今後の見通し

二〇一九年末に中国湖北省武漢市
で新型コロナウイルスによる肺炎の
流行が起こり、連日数千人から一
万人規模で感染者が増え続け、現在
では中国全域に広がっています。も
はや中国では流行拡大を鎮圧するの
は不可能な状態となっています。そ
の間に大挙して押し寄せた中国人来
訪者により、三十二ヶ国に新型コロナ
ウイルスが飛び火し、韓国、日本、シ
ンガポールなどでは感染者が増え続
け深刻な国際問題になっています。
特に韓国では感染者が急増してお
り、中国と同じように鎮圧が難しい

深刻な事態になりつつあります。日
本も同様の状況になるのは時間の問
題と思われず、政府の専門家会議
の状況分析では、日本は感染拡大期
に入っており、どこかの県で感染者が
出ても不思議ではない段階に入った
と解釈されています。自分自身や身
近な人がいきなり新型コロナウイルス
に感染したという事態を今後は覚
悟する必要があります。

2 感染者の病状と優先的に守らなければならない人々

新型コロナウイルスに感染した人
の主症状は、38℃以上の発熱、乾い
た咳、全身倦怠感と息苦しきです。
中には肺炎を起こす人もいます。深
刻な肺炎にまで至る人はそれ程多く
はなく、感染者の17%ほどです。致
死率も暫定値(二月二十五日現在)で
すが23%であり、多くの人は軽症で
すみます。

しかし、中国疾病予防センターか
らの発表によると、年齢が六〇歳以
上では致死率が上がり、八〇歳以上
の高齢者の場合は致死率が18%を超
えます。さらに持病(心臓循環器系
疾患、慢性呼吸器疾患、糖尿病、高
血圧)を持った高齢者の致死率が高
いことが分かっています。従って、子
供や健康な成人たちが感染した場合
には、身近にそのようなお年寄り
がいる時はうつきさないように注意
する必要があります。また、そのよ
うなお年寄りは優先的に治療が受け
られる医療体制を整えておく必要が
あります。

3 感染ルートと予防法

感染ルートはインフルエンザと同
じ、咳やくしゃみによる飛沫感染と
ウイルスが付いた手指からの接触感
染が主です(図)。従って感染予防対
策は、インフルエンザ予防対策と同
じ、マスクの着用による『咳エチケット』、石鹸や消毒用アルコールでの手
指のこまめな洗浄の励行が重要で
す。しかし、首都圏のみならず地方
都市でもマスクの入手が困難になっ
ており、爆買の自粛など日本人と
しての誇りと節度をもった冷静な対
応が必要です。現在、マスクは週産二
億枚の態勢に入っていますので、ま
もなく不足の状況は解消されるもの
と思われれます。

● 感染経路



で、しばらく期待できません。一人一
人が感染予防対策をしつかりして、
感染した場合は他人へ移さない配慮
をすることで今回の危機を乗り切る
しかありません。合言葉は、『うつら
ないための自己防衛策、他人にうつ
さないやさしさ』です。早くこの流
行が終息し健康被害が最小ですむこ
とを願って筆を置きます。

